

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## ヤスィックアケルの蒼い空 3 情報収集と登山準備 2

14:00 にカシュガルに到着。今回のカシュガルの宿は、旧イギリス領事館の跡地に建つ「チニワク（果樹園）ホテル」。チェックイン、昼食の後、ヌルさんの案内で新疆新陸旅行社へと向かう。この社長の董慶国さんは、ヌルさんの友人。かつてのカシュガル登山協会（今は解散）の重役で、新しく会社を興した今でもカシュガル地区の登山や探検を多く受け入れている。我々の荷物の受け入れ先でもあった。日本から送っておいた荷物と対面。およそ250kgに上る装備と食糧、13個口の荷物はすべて未開封のまま届いていた。実は僕は11年前の遠征の時、隊荷の遅延により登山活動が送れたという苦い経験を持っている。今回はとりあえずまず第1関門は通過である。荷物を確認しているところへ、我々より1本遅い飛行機でウルムチからやってきた新疆登山協会の藩震宇さんが顔を見せる。藩さんは1999年に僕が初めて新疆の偵察に来たとき、登山協会の新米の通訳として同行してくれたのだが、今や登山協会の重役となっている。新疆で登山する場合には登山協会の許可を受けた上で連絡官が同行するという事になっているのだが、しかし、実際には金だけをポッポに入れて（来ようが来まいが日数分はしっかり払わねばならない）同行しない例が多い。今回の連絡官が彼なのである。藩さんも、今回一日だけはついてくるが、結局その足でとんぼ返りするということのようだ。不合理とは思いますが、ここはそういう国なのだ。

さて、カシュガルには3泊するので、少し余裕がある。ちょっとした空き時間に旅行社の隣にある床屋に目をつけた山内君が飛び込む。床屋のおばさんの腕前は結構なもので、15分ほどでさっぱりした頭になった。シャンプーまでしてもらって20元はお買い得と山内君はご満悦。今日は、日曜日なので、バザールに行くことにする。カシュガルの日曜バザールは、ホータンのそれと並んで新疆でも指折り、ロバ車、電動車、車、徒歩と、ありとあらゆる手段で市内ばかりか近在の村からも多くの人がやってきてその混雑ぶりは一通りではない。そこには「羊の卵」だけともいわれ、どんなものでもある。日用品、食糧、衣服はいわずもがな、「こんなもの売れるの？」と思うようなさびた鉄くずなども平気で並んでいる。そこはまさに中央アジアの交易の町の生きるエネルギーが凝縮された場所。バザールに来ると一気に中央アジアの真ん中にいることを実感する。僕がカシュガルへ訪れるのはこれが5度目だが、この喧噪が癖になる。体験をモットーとする記者佐藤君は、果敢にも生きたサソリの生食に挑戦！しようとしたが、「毒抜きが必要」と逆に地元の人からいさめられる部分も。みんなのテンションが一気にヒートアップ。夕食後も、腹ごなしにと勝手知ったる街を、みんなを誘ってエティガルモスクまで散歩。ここでもまた雨に打たれた。どうも天気が今一つである。

## 情報収集と登山準備

7月18日、今日は終日、登山準備に当てる予定を組んだ。食糧係の三戸呂君を中心に久根、佐藤の3人は超市（文字通りスーパーマーケット）へ買い出しに、装備の山内君

は隊長と二人で旅行社の倉庫で隊荷の整理。私はヌルさんと二人でキルギス人のポーターの契約に向かった。今回僕らの入る地域は、全く人が住んでいない。しかし、BCからABC（前進ベースキャンプ）までは、負担軽減のためヌルさんを通じてポーターを捜してもらった。なかなか見つからなかったのだが、直前になってかつてカシュガル登山協会の秘書長をしていたゲームさんという人物を通じて、ムスターグアタ方面でポーターをしたことのあるキルギス人が手配できそうだと連絡を受けていた。裏通りを入った少し怪しげな通りに建つビルの一室でそのゲームさんと会った。ポーターは一人がドゥーレッドビッキ（33歳）、もう一人はマイルジャンという25歳の青年だ。いずれも小柄だが、力はあるそうだし、まじめそうなのが気に入った。契約は200kgの荷物を4日間でABCまであげる。追加は1kg30元、保険やその他のことなど細かいところまできっちり契約した。それというのも、かつてこの方面のポーターが仕事を途中でほっぽり出して逃げ帰ったことがあったとのことで、今回はそうならないようにゲームさんがきちんと契約書を用意してくれてあったのだ。



さて、昨日は山内君が床屋で満足したが、今日の満足君は佐藤君。ウルムチの空港で預けたメインザックのピッケルホルダーが飛行機での輸送中に破れてしまっていた。自分で縫うしかないかと諦めていた佐藤君が見つけたのが、街角の仕立屋。店先でミシンを使っているオネーちゃんに頼むと、ごっついザックを暫く矯めつ眇めつしていたが、やがて当て布をしてキレイに直してくれた。これでなんとたったの5元。散髪が

20元、ミシンの直しが5元なら、続いては10元での空中散歩のお話。我らが旅行社のそばには東湖という庶民の憩いの場ともなっている池があって、その脇には10年前にできた「大観覧車」がある。2001年に来たときにもできたばかりのそれに乗って表通りのビル街と裏通りの日干しレンガの平屋のギャップに驚かされたのだが、今回も高い所が好きな隊長が乗ってみたいとのたまった。10年前にはこの観覧車があるだけだったが、今は辺り一帯がちょっとした遊具やお化け屋敷もあるミニアミューズメントパークになっている。10元で乗り込んだ観覧車の空中から見ると、町中心部はかつての日干し煉瓦の建物が激減し、裏通りにも高層アパートが増えているのが如実に感じられた。

ところで今日の午後、登山隊に1人の仲間が加わった。グリさんというトルファン出身の妙齢の女性。なんでもヌルさんの会社で手伝いをしているとのことで、わずか2年間日本語を勉強しただけということだが、その流暢な日本語には脱帽であった。このグリさん、山に行くのは全く初めてということで、最初は不安もあったのだが、それは全くの杞憂。登山活動中ずっとBCにいてくれたが、紅一点、料理も上手で大変に心強いアシスタントであった。

夕食後佐藤君、三戸呂君と3人で街に出ると、薄暗い路地の奥でウイグル帽をかぶった老人たちが絨毯の上に腰を下ろしてみんなでお茶を飲んでいるところでくわした。なんだか怪しげな感じでもあるが、好奇心から近寄っていくと手招きで来いという。お茶を飲めるかとジュースチャーをすると、大歓迎さばかりにぼくらにもお茶をふるまってくれた。ウイグル人はお茶が好きで、よく飲み話す。ことばはわからなくても、気のいい人ばかりだ。旅先の楽しい一時だった。